

## 2015年度大阪女学院中学校・高等学校事業報告

(後述において、枠内は2015年度の計画内容を示す)

### I. 建学の精神と教育理念

#### 1. キリスト教に基づく人間理解の深化

大阪女学院中学校・高等学校は女性が一人の人格として、何らかの方法で働く義務を悟り、正直に仕事をするを誇りとし、日常生活の雑事を越えて、物事を見抜く力をもつ人間を育むことを目指す。宗教教育については、長年の実績を踏まえた上で、キリスト教に基づく人間理解を深め、一人ひとりがかけがえのない存在であることの自覚を促し、生徒自らの生き方と他者とのかかわり方を学ばせる。また、入学後、保護者に対しても、キリスト教教育への理解を深めてもらえるよう努める。

年間聖句 「何が主に喜ばれるかを吟味しなさい。」(エフェソ 5:10)

礼拝【中学校】月、水、金 は中1、中2、中3 合同でチャペル礼拝

火、木、土 はクラス礼拝

音楽礼拝(年3回)、イースター礼拝、母の日礼拝、花の日礼拝

【高等学校】火、木、土 は高1、高2、高3 合同でチャペル礼拝

月、水、金 はクラス礼拝

英語科英語礼拝(年8回) OCC ホール

英語礼拝(年4回) チャペル

音楽礼拝(年3回)、イースター礼拝、母の日礼拝、花の日礼拝

#### 修養会

中1:7月7日(火)～9日(木) 1泊2日 2班 於 VIP アルパインローズビレッジ

主題「わたしを変える力」

講師 佐伯淳平先生(Be One ネットワーク教会牧師)、神山みささん(ゴスペルシンガー)

中2:7月7日(火)～9日(木) 1泊2日 2班 於 京都・烟河

主題「平和を実現する人は幸いである」

講師 谷本仰先生(日本バプテスト連盟南小倉バプテスト教会牧師)

中3:12月9日(水) 於 ヘールチャペル

主題「君は助けてと言えるかー人として生きる」

講師 奥田知志先生(日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師)

高1:7月7日(火)～9日(木) 1泊2日 2班 於 奈良パークホテル

主題「いのち輝く時」

講師 松浦悟郎先生(カトリック名古屋教区司教)

高2:3月11日(金) 於 大阪クリスチャンセンターホール

主題「わたしたちは、ひとつの体ー社会的弱者とされる人たちと共に生きるー」

講師 奥田知志先生(日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師)

事前準備:施設訪問

(大阪水上隣保館、止揚学園、加古川バプテスト教会、日本国際飢餓対策機構、光明園家族教会)

高3:7月6日(月)～8日(水) 1泊2日 2班 於 ユニトピアささやま

主題「あなたが手に持っているものは何かー神に知られている私を知る」

講師 深井智朗先生(金城学院大学人間科学部宗教主事)

伝道週間 9月28日(月)～10月4日(日)

主題講演師 安藤理恵子先生(玉川聖学院学院長、日本神の教会連盟練馬神の教会牧師)

宗教行事 3月8日(火) 中高映画鑑賞会 『グローリー 明日への行進』

公開クリスマス 12月17日(木) 3回実施

中学校、高等学校 宗教行事感想文集「えのき」40号発刊

## 2. 建学の精神の再認識と再構築

本校が、国際的な視点に立つミッションスクールとして、また女子の教育機関として設立されたという建学の精神を再認識し、グローバル化の進む現代に生きる女子のための教育の充実に努める。

- ・本校の建学の精神や沿革等をまとめた冊子『愛と奉仕 宗教教育活動ガイドブック』を新入生に配布し、聖書の授業で教材として使用した。またホール会主催の「聖書を学ぶ集い」を年間5回行い、建学の精神への理解を深める機会とした。
- ・キリスト教学校フェアへの参加 6月14日(日) 会場 太閤園  
大阪府下14校のキリスト教主義学校が合同で、キリスト教教育の特徴、建学の精神、生徒のボランティア活動を通じて、キリスト教教育の教育方針を説明した。
- ・大阪私立女子中フェスタ・フェアへの参加 4月29日(水) 会場 大阪新阪急ホテル  
大阪地区の16校の私立女子中学校が、中高時代における女子教育の価値を直接伝えることができた。

## II. 教育の内容と学習支援

上記の教育理念を具現化するため、生徒一人ひとりに与えられた賜を活かし、社会に貢献するための学力、協調性をもった行動力、自己と他者を大切にすること、人権意識、円滑な社会生活を営むための規範意識、そして世界平和を実現するための国際性を身につけること―「真の生きる力」を養う教育を目指し、教員同士、互いを大切にし、助け合いつつ、以下の取り組みを行う。

### 1. 学力向上の取り組み

- ・各教科で、学年、科目における目標設定を行い、教員の授業力UPを目指す。
- ・中学校入学時から高等学校卒業までに偏差値10ポイントUPを目指す。
- ・激しく変化する時代の中で、どんな困難な状況にあっても、希望をもって、創造的に、他者とともに生涯にわたり学習し、成長を続けていく「真の学力」を身につけることを目指す。
- ・中高一貫カリキュラムを見直し、成果と課題についての検討を進め、各教科でより充実したシラバスの作成を行う。特に目標に対する評価・測定方法を確立するよう試行する。
- ・自学自習できる主体性と自己管理の指導に取り組む。
- ・講演後の感想文、クラス礼拝の生徒スピーチ等数多くある表現の機会を精査し、一定の評価やレスポンスを行う方法を検討し、自分の意見を論理的にアウトプットする力を向上させていく。

中学校では1年、2年で論理の基礎を学ぶため、2016年度より「論理エンジン」のテキストを利用したカリキュラムの導入を決定。国語科をはじめ全教員で取り組む方針である。また地道な取り組みとしては、オープン授業の期間(互いの授業を見学することができる週間)を利用して研究授業を行う教科の取り組みが、教員間で成果を上げている。2020年の大学入試、高大接続改革に向かっている学力観の変化の中で、いわゆる偏差値教育はいよいよ意味をなさなくなっていく。現在、本校は「世界的に評価の高い国際教育の中等教育プログラム」の導入を目指し、探究型、教科横断型、アクティブラーニングのカリキュラム・新しい評価方を、数年のうちに専任教員全員が研修することを目標としている。文科省が目指す改革を契機に、このプログラムの導入を実現し、授業、宗教、解放(人権)教育、生活指導が統合された学習体系を構築すべく、進もうとしている。

### 2. 授業内容の充実のための取り組み

- ・2週間時間割による授業時間の確保を行い、集中して自ら学習に取り組む力を身につけさせる。
- ・分割授業、習熟度別クラス編成の授業形態によるボトムアップに加え、応用・発展をさらに進めるためのプログラムについて検討する。
- ・高等学校全クラスに電子黒板を設置し、英語の授業をはじめ、各教科において有効に活用し、授業内容のさらなる充実を図る。

学力検討委員会を月1回程度継続して開き、入学からの生徒の学力とその推移を分析しながら、実情に応じた効果的なシラバスの策定を教科に要請し、学習内容の改善を進めた。特に習熟度別授業の展開等については、当該教科で検討が行われ、改善された。

### 3. 英語科の改革

英語科が創設より半世紀を越え、国際的な視野に立つて物事を見ることがさらに重視される現代において、カリキュラムに世界情勢を踏まえた内容を積極的に取り入れていく。また、種々の英語の資格試験について目標を設定し、英語力のさらなるアップをめざしていく。

- ・2013年度より始まった英語科改革を、行事・授業改革を中心にさらに推進する。変革する多様な大学入試への対応は勿論、留学志望生徒への対応という意味でも、4技能外部資格試験対策をさらに包括的に推進する。
- ・資格試験のスコア目標を掲げた授業を行い、その成果が高まった。
- ・8月末の1週間、「エンパワーメント授業」を、英語科全生徒に対して行う初年度であった。英語科主事、学年英語科担当で、1学期の授業内容から入念な準備を行い、生徒のモチベーション面、スキル面ともに大きな成果があった。

### 4. 国際理解教育の推進

- ・留学や留学生との交流を通じ、言語への関心を深め、言語や文化の違いを知ることで、世界に目を向け、広い視野をもって物事を考える生徒を育てる。
- ・2015年度も、年間留学生1名、中期留学生2名、短期留学生3名を受け入れる予定である。また、本校から年間留学、短期留学する生徒へのサポートを充実させる。留学の経験を中高の在校生に伝える、国際理解を深めていく。
- ・2015年度より中学校に設置した「国際特別入試制度」を継続・発展させる。
- ・年間留学を希望する生徒に、4月と9月の2回、学内で年間留学説明会（カナダ年間留学説明会は3回）を開き、情報提供を行った。説明会には将来を見据えて中学生にも参加を呼びかけた。
- ・中期（3学期間）留学を希望する高1を対象に、2月に留学説明会を開き、情報提供を行った。
- ・YFUを通してドイツからの年間留学生1名、オーストラリア姉妹校からの短期留学生2名、YFUを通して韓国からの短期留学生1名を、本校の生徒の家庭で受け入れた。
- ・留学生を受け入れた高2年では、留学生との交流を通じて、言語や文化の違いを感じ、考える機会を持てたことは、大きな収穫であった。
- ・「国際特別入試」によって入学してきた生徒（2015年度中学1年生6名）に対する週1回のネイティブによる特別授業を継続して行い、成果を上げた。高校英語科生徒との交流も行い、英語オープンキャンパスなど外部に対して積極的に発表する機会を持ち、本校の英語教育プログラムのアピールを行った。

### 5. 生徒の人権意識を深める取り組み

解放教育(人権教育)については、「私たちの人権感覚を問い直そう」～一人ひとりを大切にしよう～という教育目標の下で、次の事に取り組む。

- ・人は皆、神によって創られたかけがえのない存在であることを深く認識し、日常生活において、一人ひとりの生徒が大切にされる解放教育を目指す。
- ・私たちの身近な差別を見つめ、生き方の本質に深く関わっていることを学び、自他(人間)の解放のために何が出来るかを考える。
- ・世界の人権の状況を知り、人権を獲得し、守り、発展させていく意味を学ぶ。また、教職員の積極的な校内外研修参加で、解放教育をさらに実り豊かなものにする。
- ・SNSを利用するための知識、メディアリテラシーについて適切に学ぶ。

- ・生徒がお互いの存在を尊重しあうことが大切にされる解放教育をめざした。
- ・世界の人権状況と人権獲得の歴史を学び、守り、発展させていく意味を考えさせ、各学年の発達段階に応じて、生徒自らの人権意識を深める取り決めをそれぞれ各学年のテーマを定めて行った。
- ・携帯電話・インターネットの扱いやいじめの問題に対する生徒の問題意識をさらに深めた。

#### 【学年別テーマ】

- 中1 「世界の民族～多民族国家としての日本」
- 中2 「Be-ing～私から始まる平和リレー～」
- 中3 「平和学習・障がい者理解・部落差別学習」

高1 「世界の民族～多民族国家としての日本」

高2 「共生」から「共有」へ ～社会のひずみからくる痛みを共に担う生き方へ～

高3 「格差社会：被差別部落問題・障がい者問題について学ぶ」

【中学校 平和を考える日】 映画「少年H」鑑賞と中3生徒の修学旅行感想文発表

【全体解放】 講師 在日コリアン チャンヘンさんによるジャグリングと講演

## 6. 生徒の生活全般に対する指導

生活指導については、中学・高校それぞれの発達段階を考慮しつつ、基本的な生活習慣や社会性を養う。

特に、人間関係を構築する力、社会のルール、マナーを守り、礼儀正しく人と接する力、広く社会に目を向け、他者の人権を尊重し、コミュニケーションの中で相互理解を深め、主体的に行動する力を育てる。

宗教・解放(人権)教育・生活指導・進路指導の各部門が協力し、プログラムを新たに開発する。

健康的な生活習慣を身につけ、セルフメディケーション能力を高めることができるよう指導する。

- ・生徒たちは、生徒会主催の体育大会、文化祭、学年単位で行う合唱祭・宗教行事・全体解放・弁論大会・暗唱大会など種々の行事に参加者として、また運営企画する者として、多くの人とコミュニケーションを深め、創造性、社会性を身につけた。
- ・制服の着用指導・登校指導などの生活指導を通じて、遵法精神を身につけた。
- ・年2回の集中面談、三者面談・家庭訪問などの機会を持ち、生徒の学習と学校生活をサポートした。

## 7. 学校行事による集団作り

生徒がリーダーシップをとり、自主的、かつ計画的に集団を動かしていく力を身につける機会として学校行事をとらえ、協調して互いの力を活かすチーム力を養う。特に、時間、費用、あとかたづけ、ゴミ処理等、自分たちでトータルに計画、管理していくことができるよう指導する。

中学校ではHR教室の片付けを生徒全員で行ってから終礼を行うこととし、管理・運営の自主性を促した。

また行事において、生徒達は各部署、クラス、委員等で、さまざまな問題にぶつかりながらも、多くの人の協力を得てそれを乗り越え、体育大会・合唱祭・文化祭等、自主的な運営を行い、大きな成果を上げた。

社会で生きて行く力、社会を良い方向に変えていく方法を学ぶ機会となった。

## Ⅲ. 教育の実施体制

### 1. 生徒の安定的な人数確保のための取り組み

中学校・高等学校 目標生徒数は、学力レベルをできる限り維持しつつ、以下を目標とする。

中学校 190名(募集人数) 高等学校 80名(募集人数)

受験希望者、保護者への広報活動、募集活動を強化し、受験生増を目指す。

#### (1) 広報の充実

- a. HP、公式フェイスブック等の活用によるリアルタイムでの学校紹介
- b. 卒業生の働き～時代を越えてつながる愛と奉仕の精神～の取材広報

#### (2) 説明会・学校訪問の全教員での取り組み

- a. 全教員で行う在校生の出身公立中学校訪問、オープンキャンパス、入試説明会の継続
- b. 在校生、卒業生の保護者、卒業生による「保護者のためのevening説明会」の継続
- c. 募集のための新しいイベントの企画

#### (3) 入試対策室の充実

入試対策副室長の設置

#### (4) 2015年度よりの中学入試「国際特別入試制度」の継続と発展

「国際特別」入学生の学習プログラムの整備

「国際特別」入学生を中心とする国際理解教育の発展

- ・大学進学で今後求められる総合的な学力を見据えながら、そのために本校がすでに継続して行ってきた教育内容をスキームにまとめ、アピールすることに努めた。スキーム作成による広報は募集に大きな効果があった。

- ・中学校・高等学校ともに入試説明会において、具体的な英語授業をアピールするなど、受験生の立場から関心のある内容が盛り込まれることで、専願受験者増につながった。
- ・教員全体制でオープンキャンパス、入試説明会、中学校訪問(高等学校入学生の出身中学)等に取り組み広報を展開し、募集では成果を得た。
- ・国際特別入試制度は、小学校での英語活動や、様々な英語環境に触れ、英語を運用することに対して積極的な意識や態度を有する生徒を、優先的に募集することを旨とした。小学校英語活動では文字が導入されていないため、音声のみで出題・解答する英語の試験を課し、国語と算数の基礎的な内容を問う試験でこの入試を構成する。ただし、英検3級以上、TOEIC250点以上、GTECforStudents350以上のスコアを有する者については、英語を免除する。この試験で合格した生徒は、すでに獲得している英語運用能力を後退させないため、入学後週1時間の特別英語授業に参加した。
- ・高等学校入試において、定員確保だけにとらわれることなく、基準を設定することで、学習する意欲と力のある入学生を迎えられた。
- ・理系を2類と1類に分けて募集を行い、内部進学生の理系進路希望者増に応えるができた。ただ、高校からの受験生に対しては、まだまだ広報が不十分であったためか、出願者は少し増えたが入学生数は定員に届かなかった。
- ・入試対策室長、副室長体制での塾訪問がより手厚く、充実したものとなった。また広報物、ノベルティーなども年々充実し、受験生増につながっている。

## 2. 中学校・高等学校の組織改善の取り組み

教職員組織制度が円滑に機能するよう努め、中高一貫教育が更に充実するよう、中学校・高等学校の組織の活性化を図る。若い世代が、中高6学年を偏りなく、すべて経験し、どの学年に所属しても、一貫教育の展望をもって指導できるように人事配置を行う努力をする。

すべての教員が中高両方の経験を持つことができるよう、中高一貫教育型人事を推進した。団塊の世代の教員が次々と定年を迎え、若い世代の教員の割合が増え、当然の了解事項や不文律として共有していたことが、伝達連絡されないままになることがあった。丁寧な報告、連絡、相談が必要である。

## 3. 中学校・高等学校 図書館機能の充実

### (1)蔵書整備

学校の教育活動を情報面からサポートするための各種資料・情報を収集する。

授業や行事のための調べ学習資料、豊かな感性や情操を育む資料、キャリア教育関連資料、教職員向け教科指導用教材、研究、行事のための資料など。

### (2)利用教育

情報収集ガイダンスの実施や、パスファインダー(情報の探し方や活用方法を紹介したリーフレット)を作成し、資料・情報を活用し自立して課題解決ができるように支援する。

### (3)教員との連携

教員との連携を密にし、生徒の図書館利活用と授業に必要な資料収集の充実を図る。

### (4)図書委員会活動

読書感想文コンクール、文化祭発表、他校図書委員との交流会実施など活動を支援する。また、選書、展示企画など図書館運営への協力を得る。

### (5)その他 タブレット端末を活用した授業の推進計画に対して必要な環境整備を検討する。

- ・生徒の学習支援、教職員向け教材研究用、行事、キャリア教育関連をはじめ、英語多読用図書 236 冊を含む 1,585 冊、視聴覚資料 75 件を受け入れた。クラブ活動用の雑誌も引き続き希望制により購入した。
- ・調べ学習のためテーマごとの情報の探し方ガイドやリストを 13 種作成。(アイヌ、ギンブナ、狂言、イースター、フェアトレード、難民、食糧問題、Thanksgiving day、エイズなど)。また、幅広い分野の資料に触れるきっかけとなるような展示を 50 種実施した。
- ・教職員が連携し図書委員会の充実を図り、生徒図書委員の活躍の場を多く持つことができた。

10月の読書週間で図書委員全員がお気に入りの図書の紹介文を作成、広報、カウンター業務など多数の仕事を担った。文化祭で古本市を初開催しポスター作成、店番を担当し、売上金は全額寄付とした。3月の選書ツアーは17名が参加し88冊購入した。

- ・国語科と共催の夏休み読書感想文コンクールは、中学生は自由参加に変更し、代わりに冬休みの宿題として実施した。
- ・タブレット端末を活用した授業の推進に必要な環境を整えた。

#### 4. 中学校・高等学校教員の人材育成

##### (1)建学の精神の学び

教職員全員で建学の精神を共有し、その実現に向けて本校の歴史や教育の流れを学ぶ機会をもつ。

##### (2)世の中の変化や課題についての学び

オール女学院で研修会を行い、世の中の変化や課題について話し合う機会とする。

##### (3)支え合う組織づくり

多忙を極める中でも、教職員一人ひとりが孤立せず、信頼し合い、支え合うことのできる組織づくりのために、「チームOJ」(新任教員を10年目までの先輩教員が迎える一泊・親睦研修)を継続して行う。

##### (4)他校との連携

キリスト教学校教育同盟の新人研、中堅研修、大阪私立学校人権教育研究会の新人研、その他の研修に積極的に参加することによって、教員のスキルアップを図る。

##### (5)新しい学力観への対応

学力についての考え方が、「知識・技能」中心から「思考力・判断力・表現力」及び「意欲・経験・多様性」重視へ転換が求められる現代にあって、実践が求められている「探求型の授業」についての教員の研修を保証する。

加えて、AV教室化した環境を活かして、今後数年間で新しい授業の形を模索する。

- ・8月7日(金)学院全体研修会

開会礼拝/学院のVision OJ 140、中期計画、中高・大短の運営方針、第Ⅱ期中期計画について/講演「IB(国際バカロレア)、SGH(スーパーグローバル・ハイスクール)について」/閉会礼拝

- ・2015年度学院教育セミナー(5回)「SGH」、「オフキャンパスプログラム」「IB教育」「大阪女学院のミッション」「クリスチャン条項」など、興味深いテーマで継続して開催されている。平日放課後の17:00~で、一般教職員の参加者は少ないが、管理職中心、少人数であっても、オール女学院で、建学の精神を確認し、学院全体で世の中の課題と向き合う時間として、大切にしていきたい。
- ・チームOJ 7/29~7/30 生駒山麓ふれあいセンター ワークショップ/事例研究/親睦
- ・3月末札幌で行われた「世界的に評価の高い国際教育中等教育プログラム」教員資格研修に7名が参加。

#### IV. 生徒支援

##### 1. 生徒の自己実現を促す進路指導

##### (1)進路選択への指導、助言

2021年度大学入試より大きく入試のシステムが変化し、高3に年4回の統一試験が実施されることとなる。今後はさら中学校での進路活動を充実させ、自分自身の進路目標を高2時点で明確にすることができるように指導するため、特に中3での進路活動を充実させる。中高を通しての進路ガイダンスの更なる充実を図る。

##### 進路キャリアガイダンス

- ・中学校では中2へは2学期に、同窓生の協力により16分野の同窓生16名が来校し、進路ガイダンスを行った。3学期末にリクルートによる「未来に必要な力」と題する講演と高校のコース説明を各担当者が行い、卒業生が体験を語るHRを行った。講演は本校の教育方針に合致する内容であり、保護者にも案内して実施した。中3は1学期の初めに夢ナビプログラムを行い、やりたいことがどの学問分野につながるかを知り、高校へのコース選択へとつなげた。
- ・高等学校では高1は1学期に自分の志望する学問を見つけるために夢ナビプログラムを実施し、6月20日(土)の午後から、全員が夢ナビライブに参加し、進路につながる学問分野を考え始めることにつなげた。

2 学期にはHR6・7 時間目を利用して学問分野ごとの進路ガイダンスを実施。高2 の2 学期には大学ごとの進路ガイダンスHRを行った。

中学校・高等学校と進路ガイダンスの流れを追って、生徒ひとりひとりが進路実現に向けモチベーションを持続し、学力をつける支援をしていきたい。

- ・高3 の進路指導の充実 第一希望の進路実現に向けて、またそれがかなわない場合も、最後まで次の希望進路実現に向かうため、昨年に引き続き、入試直前のサポートの取り組みを強化した。このことにより、国公立や私立の後期入試まで粘り強く奮闘し、結果に対して充実感を得ることができた生徒が多かったのではないかと考えている。
- ・7 月にセンター試験の英語と現代文の解説授業を実施。12 月にはセンター試験の予行を行った後、大学の大教室で、代ゼミ講師による英語、現代文、古典・地理、数学の解説授業を行った。実際のセンター試験への意識づけとして充実していた。
- ・今年度も1 月の始業日からセンター試験までの1 週間で「センター対策期間」、センター自己採点返却から1 月末までの1 週間で「国公立2 次・難関私大対策期間」と位置づけ、自習を基本として、朝終礼を実施した。1 教室を質問室として時間割を組み教員が対応、さらに講義室を2 教室確保しての直前講習を実施した。朝終礼、礼拝から始まる1 日のリズムを保って、受験勉強を充実させるサポートができた。

### 進路結果の概要

18歳人口の減少とともに受験生の現役生の志願者数が上昇しており、現役生がしっかりと目的意識をもって取り組んでいくことが進路実現につながる入試になってきている。本校ではセンター試験は182名が受験した。全国平均点は文系理系ともにアップしたが、文系は8点アップ、理系が2点アップにとどまった。また、志望動向については、理高文低傾向が落ち着き、文系志望者が少し戻ってきた入試であった。その中、国公立には現役生が32名、過年度生が15名合格し、そのうち国公立に進学した者は42名であった。後期試験での合格者が例年よりも多く、最後まで粘り強く取り組んだ結果である。また関関同立4大学の合格者数は現役生で189名(延)であった。多様化する大学入試の中で戦略的に受験することが合格へつながることが明確になってきている。海外進学が4名であった。大学改革の中で、各大学の留学制度が急速に充実しており、大学での留学を考える傾向がみられる。英語外部検定試験を用いる入試が、AO入試・公募推薦入試から多くみられ、一般試験にも増えてきた。大学入試改革にむけての入試が始まっていることが感じられた。

### 2016年卒業生 進路状況 (最終進路)

	進 学					就職	その他	合 計
	大 学	短 大	専門学校	留 学	予備校			
人数	240	15	2	4	30	0	0	291
%	82.4	5.2	0.7	1.4	10.3	0	0	100
%	87.6							
%	88.3					海外進学 4名		
%	89.7							
%	100							

### 科別進路状況

	大学	短大	その他	合計
普通科	171 (81.1%)	10 (4.7%)	30 (14.2%)	211
英語科	69 (86.2%)	5 (6.3%)	6 (7.5%)	80

### 大阪女学院大学・短期大学への進学状況

#### 四年生大学合格者数 (入学者数)

#### 短期大学合格者数 (入学者数)

	四年生大学合格者数 (入学者数)			短期大学合格者数 (入学者数)			
	2014年卒	2015年卒	2016年卒		2014年卒	2015年卒	2016年卒
普通科	17(14)	16(14)	13(11)	普通科	12(12)	7(6)	7(5)
英語科	3(1)	3(2)	3(1)	英語科	2(2)	1(1)	6(3)
合計	20(15)	19(16)	13(8)	合計	14(14)	8(7)	13(7)

入試方法	受験者数		合格者数	
	大学	短大	大学	短大
学内選抜 (専願)	8	1	8	1
学内選抜 (併願)	4	3	4	3
一般(学内選抜以外)	4	9	4	9
合計	16	13	16	13

## (2)基本的学習習慣の確立

- ・定期試験2週間前に発表される試験範囲に沿った学習計画と準備を徹底させる。
- ・中学ではOJダイアリーの取り組みを継続し、学習習慣を身につけさせ、学習意欲の向上を目指す。
- ・テスト勉強だけにとらわれず、将来の進路を見据えて、毎日の学習計画と努力目標を考えさせていく。
- ・ビッグシスター学習支援制度 ー9月までに推薦で進学先の決定した高校3年生が中学1・2年の生徒の2・3学期の学習支援を行うー については継続していく。

2週間前の試験範囲発表により、定期試験の準備に取りかかる意識づけができています。中学生のOJダイアリーの活用が身につけている生徒が増えている。

BS(ビッグシスター)制度は担当生徒(高3)への事前のレクチャー・指示をより明確にして、対象生徒(中1・中2)のモチベーション、習慣づけが向上した。

\*BS(ビッグシスター)制度…8月末までに協定校、指定校等の推薦で進学先の決定した高3に、2～3学期の放課後に、中1・中2の学習の補助をもらう制度

## (3)英語の外部検定試験化への対応

2014年度より英語の外部検定試験化が本格的に始まり、2021年度完全外部検定化を目指して加速することが予想され、センター試験のみならず2次試験への影響も必至である。早急に外部検定試験に対応することが必要である。講座の開設をはじめ、検定日にあたる日曜日のクラブ活動のあり方等、具体的な検討課題に取り組む。

今年度の推薦入試では英語の外部検定試験のスコアがないために出願できなかったケースなどがあり、受験し、資格を取っておくことの必要性が高まってきている。高1では、学年で英検の受験を勧めてきた結果、受験者数が激増した。今後も継続して学年でアピールしていく。

今後、さらに日曜日のクラブ活動の在り方を見直し、受験機会を保障していく必要がある。

## (4)新しい大学入試への対応

- ・年ごとに大きく変化する大学入試において、生徒たちの希望する進路が実現するよう的確な情報の提供に努める。
- ・2021年度からの大学入試の変化に対応できるよう、教育内容を改革していく。
- ・新しい入試制度では、高等学校時代に勉学のみならずクラブ活動・ボランティア活動など様々な活動を経験していることが求められる。宗教教育や人権教育での実践と進路との関係性をさらに強め、実践のプログラムを推進する。

今年度のAO入試・推薦入試では活動内容から受験生の人となりや評価される傾向が強まり、新しい大学入試への移行が始まっていることが、はっきりと見て取れる。入試では、ただ経験したというのではなく、その経験について「語れるもの」を持っているかどうか問われる。宗教・解放でプログラムの後に書いている感想文、礼拝でのお話等の準備のあり方、推敲による内容の吟味こそが、その力の獲得につながるものとして取り組んできた。高3では志望理由書、小論文指導などにも学年、担当教科で力をいれた。

## (5)大阪女学院短大・大学という併設の特色を活かした進学指導

併設短大・大学の優れた英語・国際教育、留学や他大学への編入プログラム等を視野に入れ、特色を活かした進路指導を行う。

今年度は大学・短期大学の入試の多様化にともない受験の機会が増え、学内選抜とは別に、一般試験を受験する生徒が数名あったことが、新しい傾向であった。内部進学の特長を生かして受験をHRで伝えてきた結果であると考えられる。



## (6)協定校推薦枠の拡大

- ・2017年度入試より、関西学院大学への協定校推薦枠が25名から40名に拡大された。被推薦生徒の学力向上のために英語の外部試験での基準を設け、推薦されるにふさわしい生徒として確かな英語力を習得する為、指導を強化する。
- ・神戸薬科大学を協定校として高大連携を深める。また、神戸女学院大学を新たに協定校として高大連携を進める。

協定校の被推薦者には2・3学期にTOEIC450点以上をめざして学習を勧め、ほぼクリアできていた。

神戸薬科大学の高大接続として、夏期セミナーに薬学部を志望する高2と高3の生徒が参加。

神戸女学院大学の高大連携協定校として、『神戸女学院の100冊』書評コンテストに27名が参加。優秀賞に1名が入選した。

## 2. 心身の健康と安全を守るための生活指導と生徒支援

- ・自分自身の心身を健康に保つ方法を身につけるように指導する。そのために保健室・教育相談室（学校カウンセラー）、サポートルームと連携し、生徒・保護者をバックアップする。
- ・授業・学級活動・生徒会活動・クラブ活動・その他の活動が安全かつ充実したものになるように努める。
- ・学校外での生徒の事故やトラブル、迷惑行為等の窓口となり対応する。
- ・不登校や発達障がいなど支援を必要とする生徒をサポートするため、「支援教育委員会」を充実させ、支援のための学校チーム力を向上させる。サポートルームについては、指導員が保健室と連携しながら、利用生徒の成長に寄り添う支援をさらに進める。支援教育アドバイザーのアドバイスを元にして、支援を必要とする生徒への教員の指導力を高め、一人ひとりの生徒を大切にした教育を実践していく。
- ・特定の生徒への支援教育のスキル向上が、すべての生徒の支援に結びつくように、全教職員が意識を高めていくことを目指す。
- ・必要時、生徒の主治医や関係機関と連携をとり、適切な支援を目指す。
- ・生徒の言動・表情・着衣などを注意深く観察し、虐待の懸念・精神不安のある生徒を見逃さないよう、異常の早期発見に努める。

・サポートルーム利用希望者、支援教育相談者が少し増えた。

・受験生にも、小学校、中学校の先生方、塾関係者から紹介されて、本校の支援教育の取り組みを知り、受験を希望する生徒の相談が寄せられるようになった。

・自分自身の心身を健康に保つ方法を身につけるように指導した。そのために保健室・教育相談室（学校カウンセラー）・サポートルームが連携し、担任・生徒・保護者をバックアップした。

・授業、行事、クラブ活動、その他の行事が安全かつ充実したものになるよう努めた。

・不登校や発達障がいなどの支援を必要とする生徒をサポートするため、「支援教育委員会」を充実させ、支援のための学校チーム力を向上させた。サポートルームについては、指導員が保健室・学校カウンセラーと連携しながら利用生徒の成長に寄り添う支援をさらに進め、一人一人を大切にした教育を実践した。

## V. 改革・改善

2015年度の課題として、とりわけ以下の項目について重点的に取り組む。

### 1. 時代の求めに応じた宗教教育の推進

キリスト教学校教育同盟と連携しながら、激動の時代にあっても、自分の内面と向き合えるよう宗教教育を行っていく。

本校の宗教教育の特徴を再認識する機会として、キリスト教学校教育同盟による新任教師研修会、中堅教員リトリート(今年度は参加できず)、事務職員夏期学校に参加した。また9月25日(金)に打樋啓史先生(関西学院大学社会学部宗教主事)を招いて職員礼拝を行い、卒業生の大学生活に見る宗教的素養と現代におけるキリスト教教育の価値を再認識するキリスト教教育講演会とした。

### 2. 生徒の学力向上について

#### (1)新しい学力観への対応

学力についての考え方が「思考力・判断力・表現力」及び「意欲・経験・多様性」を重視する方向に大きく転換していく

現代、本校が従来から行ってきた国際的な視野と主体性を育てる教育活動をさらに進めていく。

また、他校(海外を含む)の先進的な教育活動を研究し、導入する。

a. 2016年度に向けてシラバスを検討、改善する。

学力検討委員会において、各教科からシラバスについての説明を受け、教育内容を把握した上で、教科間の連携、合科にむけてアレンジを検討する。

b. 自学自習できる主体性と学力を獲得するための指導を継続し、さらに進める。

①自主学習の時間(土曜3限後)の充実

②OJダイアリーによる目標、スケジュールの自己管理指導の継続(OJダイアリーの改訂)

c. 分割、習熟度別の授業形態によるボトムアップに加え、実力錬成(応用・発展)のためのプログラムを推進する。

d. 土曜講座を充実させる。(高校1年生「基礎」と「発展」の講座/高校2年生「発展」の講座)

e. BB講座を実力養成のための自主学習の場としてより充実させる。

- ・生徒全体の論理力向上のために「論理エンジン」を中学段階に導入することを検討した。8月に開発者の出口汪先生から説明を聞き、2016年度より中1・中2で導入することを決定し、準備を進めた。
- ・中学校ではセルフマネジメントの観点からオリジナルのOJダイアリーと掲示版の活用の徹底を継続した。数学の分割授業は、従来の習熟度を見直し2016年度1年生より、実情に応じた少人数制による授業へと移行することとした。
- ・2018年度に向けて、中1・中2での「論理エンジン」の学習をステップアップさせ、中3でアウトプット型の課題レポート制作(自主学習時間に代わり)のシラバスを開発していく。
- ・BS(ビッグシスター)制度は、困っている生徒にとっては、学力向上の為の良い取り組みとなっている。
- ・高1における2学期からの土曜講座においては、生徒達の意欲は見られるが、クラブ活動や学校行事等との関連で出席状況が芳しくなく、その方法において改善が必要である。
- ・合科型・探究型・アクティブラーニング、新しい評価基準の研修に専任教員全員で取り組む。

## (2)英語科、教科としての英語の改革

a. 英語科の生徒全員が、高2の夏にエンパワメント授業を経験し、現代社会のさまざまな分野の問題について、自分の意見を持ち、英語で討議する力をつける。

b. 急速に進む英語の外部検定化に対応するため、体制を整える。

c. 2021年度入試より合科型の統一テストが実施されることを鑑み、英語と他教科を結ぶテーマでの授業内容の連携、また総合力をはかる評価の研究を行い、実現をめざす。

(例 英語科における英語による代数の授業、数学、理科等の試験問題の一部を英語で出題する)

d. ネイティブ講師による英会話の授業について、学術的なものへの発展をめざす。

- ・英語外部資格試験対策として、英検のみならず、GTEC-CBTへの学校として取り組みを検討。2016年度普通科文系入学生については英語の授業の中でその対策授業を行うこととする。普通科理系においては時間数の関係で、授業内で対策内容を盛り込むことが難しいため、2学期からの土曜講座での対応とする。

## (3)「国際特別入試制度」の継続と発展

「国際特別入試制度」(中学)の広報に努め、この制度による入学生の学習プログラムの整備を進め、この生徒たちを中心に国際理解教育を推進する。

- ・2016年度入試では、この制度での入学者が前年度比2倍になった。2016年度からは際特別入試による入学生の特別授業を2つのレベルで行う。中学卒業時には文部科学省が示すCEFR B1レベルを目標として、シラバスを策定した。
- ・アクティブラーニングを取り入れ、覚える教育から考える教育に転換するために、英語科の1クラスに「世界的に評価の高い国際教育の中等教育プログラム」を導入することを決定し、準備を進めた。この制度は、国際特別入試初年度の入学生が高2に進級する時期に合わせて開始できるよう準備を進める。
- ・ネイティブ教師による英検2次面接対策など、放課後の時間を利用し、英語のスピーキング能力を伸ばしたい生徒が、より良い環境で学べる体制整備を目指す。

#### (4)新指導要領完全実施の中での教育課程の見直し

高校の新指導要領の完全実施、また指導要領改訂を受けて行われる新しい大学入試に向けて、本校の教育目標に沿いつつ、現行のカリキュラムで改訂が必要なものがあれば、柔軟に対応していく。

2021年度より行われる大学の入試改革に向けて、本校の教育目標に沿いつつ、カリキュラム改訂を行う。

上記(1)～(3)を参照

#### 3. 留学の充実

YFUの年間留学生受け入れに加え、オーストラリアのRavenswood校(姉妹校)との交換留学、カナダのオタワにあるLongfields- Davidson校(姉妹提携校)、YFU韓国からの短期交換留学(1ヶ月)との交流を通して、国際(異文化)理解に取り組む。また、交換留学制度を利用して、留学を希望する生徒の支援をしていく。

- ・高1または高2の3学期に3か月間海外で学習する中期留学を創設し、2016年度より開始する準備を進めた。
- ・夏休みに高1を対象にした3週間の海外研修(ハミルトン45名、ボストン33名、モントレー36名)を実施した。
- ・夏休みに、高1・高2各1名を、シドニーの姉妹校Ravenswood校へ短期留学生として派遣した。
- ・夏休みに高2の1名を、YFUを通して韓国への短期留学生として派遣した。
- ・8月から1年間の予定で高2の1名を、オタワにある姉妹提携校のLongfields- Davidson校に派遣した。
- ・ヒラタ&アソシエイツから6名、EFから3名、AFSから1名、IFから1名、私費留学で1名、合計12名が年間留学に出発した。
- ・オタワにある姉妹提携校で1名、ヒラタ&アソシエイツで3名、YFUで2名、EFで2名、国際ロータリーで1名が、1年間の充実した留学期間を終えて帰国した。
- ・YFUを通してドイツからの年間留学生1名、11月にはオーストラリア姉妹校からの短期留学生2名を1ヶ月、1月にはYFUを通して韓国からの短期留学生1名を1ヶ月、本校の生徒の家庭で受け入れた。

#### 4. ICT教育の推進

中学生・高校生の発達段階に応じたデジタル機器の有効性について研究すると同時に、デジタル機器を活用した独自教材の開発や、授業における効果的な使用方法について研究する。

教員各々での研修参加、授業での使用工夫等の実績は年々充実したものになっているが、学校としての方向性は打ち出せていない。中1の導入を視野に入れて、2016年度・2017年度に積極的に導入について検討、準備を進める必要がある。

#### 5. 中学校・高等学校教務のシステムの統一化

中学校、高等学校の学籍管理、成績管理、時間割管理等のシステム統一を継続して進める。

ICT教育を進めるために必要な中高共通のインフラ整備設備投資について計画する。

- ・北・南校舎、図書館棟間LANの整備、HR教室のWi-Fi化を検討する。
- ・教職員のPCはデスク型共通のものに随時移行し、学内データのクラウド化管理を計画する。

タブレット型のパソコンを使用しICT教育を進める方向で業者等のプレゼンを参考にした。また、併設大学はタブレット型パソコンを使用した教育を以前より実践し、学生の中にも定着しているため参考にする。2016年度はiPad 10台分の予算を立て、教員から使用できる環境を整える。

#### 6. 組織の再構築と運営方法の見直しの継続

教員1週2休による学校運営のため、各クラスの生徒についての情報やクラス運営の課題を学年担任団全体で共有し、クラスの垣根を越えて学年団全員が学年全体の生徒を見る意識を明確に持つことにより、一人ひとりの教員が臨機応変に判断する力、迅速に対応する力を身につける。

多忙を極める各学年の現場で、授業や生徒について、行事やクラブについての連絡や相談といった最も具体的なことについてもコミュニケーションを密にとることが時間的に難しい。ましてや学校運営に関する施策について、教職員で検討し、重要な点を共有して進めていくことはなおさらのことである。このような現実の中にあって、互いが信頼関係をもって教育に当たることには、工夫が必要である。互いを尊重し合い、助け合って進んでいきたい。

## 7. 学校危機管理についての検討

危険と危機、管理を区別し、事前・事後の対応について検討、緊急時における決定権順位の再確認を含め、文書化を目指す。

- ・特に大地震を想定した危険回避訓練、およびダメージコントロールの観点から事後の生徒、教職員の緊急避難生活を想定し、準備ならびにシミュレーションによる想定訓練を管理職・教職員で進める。
- ・学内の安全管理の観点から、早急に歩車分離の施策を検討する。

- ・体育館の耐震補強工事が終了し、今後は地域の広域避難所対応を含めた、備蓄・施設・機材の充足に向けての検討、準備が必要である。
- ・5/28 中学校、5/29 高等学校と地震を想定した防災訓練を実施。また、9/4 大阪 880 万人訓練も参加し危険回避訓練を行った。

## 8. 教職員の人権意識の向上

- ・教職員の人権意識を更に高め、授業やクラブ活動での指導はもとより、日常における生徒との関わりの中で、生徒の人権に配慮した指導が十分出来るよう啓発と研修を行う。
- ・いじめ、キャンパスハラスメント事象の発生を未然に防ぐため、学校全体で積極的に取り組む。キャンパスハラスメント規程、委員会の存在を、生徒、保護者、教職員に広く知らせて、いつでも相談できる体制づくりに努める。キャンパスハラスメントに関する調査を継続して行う。
- ・多忙な中でも日頃からコミュニケーションを怠ることなく、互いに支え合い、また現場の課題について話し合える教職員集団を目指す。
- ・2015年度の教職員フィールドワークでは大阪女学院創立のヘール先生が関わられた岡山県邑久にあるハンセン病施設の家族教会の訪問を計画する。

- ・以下の日程で、教職員学習会、教職員対象解放フィールドワーク、一般公開の映画上映会を行った。

### 【教職員対象解放学習会】

6月12日(金) 講師：安田浩一さん 「ヘイトスピーチに抗して」

10月16日(木) 講師：笹川紀勝さん(憲法学者) 「戦後70年、いま憲法について考える」

### 【教職員対象解放フィールドワーク】7月20日(月) 家族教会(ハンセン病施設の邑久光明園内)

【映画上映会】 5月30日(土) 『日本と原発』

## 9. 中高大短 連携プログラムについて

キリスト教・解放(人権)・英語を中心にして連携し、大阪女学院独自の進んだ教育プログラムを生み出す。

キリスト教学校教育同盟と連携しながら、時代の求めに応じた宗教教育を実施していく。

- ・文科省の推進する高大接続改革をはじめ、今後の中高の学習内容や教育メソッドを、時代に見合う創造的なものとして構築していくために、大阪女学院大学との連携を強めることは必要不可欠である。中高大短の協力体制を作っていきたい。

## 10. 経費の削減と効率化

少子化、不況による中学受験者数の減少、大阪府の授業料無償化制度による学校負担増などの厳しい財政事情の中、事務の一元化、諸経費の見直しを継続して行い、管理部門の経費のさらなる削減と効率化を図る。また、大阪府をはじめとした教育に関する補助金制度を有効活用する。

教育に関する補助金は一定額を獲得したが、多くの学校が補助申請を提出しているため、年々補助金の一校あたりへの額が減額されているのが現状である。事務室の一元化については、日常の業務に追われ、遅々たる歩みであるが、一元化に伴う人事交流を図っていききたい。各部門の異動も視野に入れながら適正な人事を行う必要がある。

## 11. 教員の労務環境改善

教員全員が1週間に1日の研修日(2週間時間割は継続)をとる制度を維持するため、会議、LHRなどでの改善を進め、より働きやすい職場にしていこう。

教員1週2休の体制の実施を、時間割、朝終礼、生活指導の立ち番、委員会、教科会の会議時間確保等、かなりの

無理を承知で継続している。平日の人手の少ない忙しさがあっても、日曜以外に週1日の研修日が取れることは、教員の心身健康上重要である。条件の改善のためには、専任、常勤講師の人数増が必須である。引き続き検討し、改善を目指す。

## 12. 施設内全面禁煙の取り組み

喫煙者の健康増進にもつなげる禁煙の呼びかけを継続して行っていく。

喫煙者は少数にはなったが、今年度については、積極的な禁煙の呼びかけは行わなかった。